

「幕末・明治期の外国人居留地における洋服仕立て業および販売業」

本研究は、幕末から明治期にかけ、洋服仕立て業および販売業が外国人居留地（長崎・横浜・神戸）において形成され発展していく過程を明らかにすることを目的とし、諸外国から外国人居留地への人（洋服仕立て業者および販売業者）と物（洋服そのもの）の流入、および外国人から日本人への洋服仕立て技術伝播の実態解明を試みた。

また、洋服業形成の予兆を明らかにすべく、外国人居留地が設置される以前の日本国内における洋服に関する事象についても安土・桃山時代から精査した。そして、洋服仕立て業および販売業の予兆・形成・発展に関する体系的な知見を得て理論化することを試みた。

資料は、開港場で発行された英字新聞（総計約 2,200 号）や、Directory と総称される数種の居留地名簿を中心に、未だ調査が及んでいない一次資料も用いた。これらを包括的に精査することは、先行研究にはない初の試みである。

以下に、本論文第 1 章から第 6 章までを要約する。

第 1 章は「序論」と題し、本研究における問題の所在と先行研究を明らかにした上で、研究目的と方法、意義について言及した。

第 2 章は「洋服の流入と洋服仕立て業者進出の予兆—安土・桃山時代から幕末開港まで—」と題し、安政の開国以前に起こった洋服の流入と洋服業者が進出する予兆について明らかにした。

第 3 章は「洋服販売業者の進出—開港直後（文久年間）の長崎と横浜—」と題し、安政の開国以降に起こった日本国内における洋服販売業者の進出（洋服業の形成）について明らかにした。

第 4 章は「洋服仕立て業者の進出—文久から慶応年間における長崎と横浜—」と題し、第 3 章で明らかにした洋服販売業者に続いて長崎・横浜外国人居留地に進出した洋服仕立て業者（洋服業の形成）について明らかにした。

第 5 章は「洋服仕立て業者の展開—明治期の長崎と横浜、そして神戸—」と題し、明治元（1868）年から外国人居留地が撤廃される明治 32（1899）年の間に営業していた洋服仕立て業者について、2 つの視点から調査を行い新しい知見を得た。

第一に、第 4 章で明らかにした洋服仕立て業者の進退と、新進の業者に着目し、洋服業が発展していく過程を明らかにした。その際、慶応 3（1868）年に設置された神戸外国人居留地における当該業者の検討を加えた。

第二に、外国業者から日本人への洋服仕立て技術伝播について、横浜外国人居留地をめぐる事例を明らかにした。

第 6 章は「総論」と題し、各章を要約し結論を述べるとともに、これについて考察した。次に、特筆すべき事項について言及する。

第一に、洋服業の出現は開港以前の長崎にあり、形成と発展は開港後の横浜外国人居留地にあると言えるが、長崎と横浜の事象を一続きに述べることは出来ない。

長崎には、安土・桃山時代の頃から洋服が流入し、洋服仕立てを心得た日本人職人がいた可能性が高い。江戸時代には、平戸や出島に外国人を顧客とする中国やスペイン、オランダの洋服仕立て業者が幾らか出入りしていた。洋服業は、数百年という長期の間に、漸進的に緩やかに日本国内へ進出してきたと言える。

しかしながら、その後の洋服業者の発展は認められなかった。このことは、長崎が安政の開国後は貿易港として繁栄しなかったことに起因する。

これに対し、開国後に設置された横浜外国人居留地では、イギリスやドイツ、中国の業者がいち早く開業し急速な発展を遂げた。その多くは、先に香港や上海で開業している業者であった。慶応の頃には、欧米業者から派生した業者が開業し始め、洋服業の発展の兆しが認められた。彼らは、商品の仕入れから宣伝、販売までを自ら行い、洋服業を商業として発展させていった。

第二に、長崎・横浜外国人居留地ともに、洋服仕立て業者より先行して、雑貨商や競売商が洋服を販売していた。このことは、香港が植民地となり上海租界が設置された当初と共通しており、未開の地における特徴の一つと言える。

ただし、慶応 3（1868）年に設置された神戸外国人居留地は、開港当初から洋服仕立て業を専業とする業者が開業していた。この横浜から神戸への＜人＞と＜物＞の移動は、開国からおよそ 10 年の間に、横浜における洋服業が急速に発展していった証でもある。並びに、洋服業という商業が、横浜を起点に日本国内へ展開し始めたことを示す事例と言える。

第三に、長崎・横浜外国人居留地における洋服業の出現・形成において、中国との連関が垣間見られた。洋服業者の中には、欧米から直接来日した欧米業者のほか、香港・上海より来日した欧米中の業者があった。中国業者は、香港・上海において欧米業者から洋服仕立て技術を習得した。このことは、洋服業という西洋文化が中国を介して日本に持ち込まれたことを意味している。ただし、来日した欧米業者と中国業者が商業上で連関することはない。

加えて、横浜外国人居留地で営業する欧米中の業者から洋服仕立て技術を習得した日本の職人が複数認められることと、後に彼らが自身の店舗を持つまでに成長を遂げたことに着目したい。これより、日本における洋服仕立て技術の根源を探ると、欧米人より直接習った欧米直伝系と、中国人を介して習った中国経由系に別れることが明らかとなる。

総じて、本研究は、学術的な見地から、日本における洋服業の源流を欧米のみならず中国に見出した初の試みであり、日本はもとより中国の服飾文化史の進展にも貢献することが出来る。また、安土・桃山時代から明治時代までを包括的に理論化したことは、今後の服飾研究に新たな視座を与えるものと言える。